

源氏物語論攷

— 紫式部の姫君形成(一) —

目加田さくを

源氏物語ならびに紫式部日記において、「姫君」なる語が、どの様に用いられているか、その事の吟味調査に基づいて、源氏物語にかかわる一二の問題に入つてゆこうと思ふのである。

—

先ず、便宜上、その記事の事件事象が、寛弘五年七月初旬より寛弘七年正月頃に終るところの、原形の如何はさておき、とにかく、紫式部の実録とみなされている紫式部日記において、式部が「姫君」なる語を、どの様に使用していたかを見ておく事とする。

(1) ものの姫君

弁の宰相の風寝姿を見て、「絵にかきたるもの^の姫君^の心地すれば云々」と記しながら、直接、弁の宰相に話しかける言葉としては、「物語の女の心地もし給へるかな」というのである。従つて、弁の宰相を、「姫君」と呼称した事にはならない。飽くまで、概念としての「姫君」を意味するわけである。

(2) 姫君

大臣道長の三女威子をさす。

(3) 姫君

大臣道長の四女嬉子をさす。

(4) 姫君ながらのもてなし

上臈女房が出仕以前、自邸にいた時代、その時期の彼女達をさす。「いとあやかに見ぬい給ふ上臈たちは対面し給ふ事難し又会ひても何事をかはかばかしくの給ふべくも見えず……ただ姫君ながらのもてなしにぞ皆ものし給ふ」というのは、上臈女房は通常、大臣の女、孫女である場合が多いのであるが、中宮彰子の宮殿に出仕して、中宮大夫等の応接に出ても鮮かな応答が出来ず、——宮仕に出れば、上流の女性も宮仕の風に慣れ社交も弁えるものであるのに——未だに昔の姫君——(大臣の女、孫女として深窓にいつきかしづかれていた時代の)——風でまあ、おいで遊ばす事よ、と、紫式部が皮肉をいつているわけで、今、目前の上臈女房その人を指して「姫君」と呼称するのではないのである。

以上、紫式部日記においては、指示する対象が明瞭な場合、(2)(3)は大臣の女を指して「姫君」と呼称している事、又上臈女房が出仕以前、即ち自邸の深窓にいた大臣の女、或は孫女、時代の彼女等(4)「姫君」と呼称している事、抽象概念たる「ものの姫君」の用例の場合ですら、上臈女房ならぬ、つまり、大臣等という一流の公卿の女出身ではない弁宰相の君を呼びかけては、「物語の女」といつ

ている事実、は注目すべきであつて、結局、紫式部日記においては「姫君」という呼称は、大臣の女（或は孫女）に対して用いている——大臣（或は公卿）の女ではない身分の者の女、に対しては「姫君」という呼称を用いたがらぬ傾向がある——という事を帰納し得たわけである。

二

I. 姫君の身分

さて、慇々、フィクションである源氏物語において、紫式部は「姫君」をどの様に形成しているであろうか。

先ず、「姫君」の属する身分、階層を、用例によつて調べてみる事とする。結論を要約して言えば、凡そ三類に分かたれる様である。即ち、

一類（氏名は姫君の呼称が当該ケ所において指す人物名。数字は頻度。順序は登場の順。）

葵上 7 紫上 16 紫上母 2 末摘花 6 右大臣女 1 兵部卿宮女
1 明石姫 15 槿 3 秋好 2 雲井雁 17 玉鬘 29 真木柱 9 夕霧
女 4 大納言女 2 鬚黒女 大君 6 妹 4 紅梅大納言 大君 3 中君 3 宇治入宮女
大君 32 中君 9 浮舟 7 尼君（衛門督）女 1 近江君 2
姫宮

藤壺 1 女三宮 26 冷泉院女一宮 3 今上女一宮 9 二宮 1

二類

物の姫君 3 一般的に言うもの 7 わが姫君云々 大臣の女を一般的に
大納言の女を一般的に
さす場合 1 住吉の姫君（中納言、後大納言で左衛門督をかけた人と、

ふるき宮腹の御女なる母宮との間の出生）1、かぐや姫 1、伊勢物語の「うらなく物を」と詠める女（昔男の妹） 1

三類

常陸前司殿の姫君（浮舟 1、守の実子 3）

右の通りであつて、就中、一類が最も多い事が分る。圧倒的数字であるから、姫君と呼称する最も普通の場合は一類でありそうである。そこで、便宜上、一類を後廻しにし、二類から見えてゆくと、抽象的乃至一般的にいう十例と、大臣、大中納言の女をいう三例、宮腹の女二例——昔男を業平と仮定して——、月界の仙女一例である。即ち、二類では、直接指す具象的な対象を有しないところの、抽象的一般的類念上の姫君、超人間的存在たる姫君、以外、つまり具に指示する対象を有する場合は、公卿の女、王族の女を指すわけである。三類では、事実上は宮の落胤浮舟をさすが、ここは継父のつながりにおいて言う場合であつて一類の浮舟の場合とは身分上異なるわけである。（一類の浮舟は、彼女が常陸前司の継北子方の連れ子という縁を辞して、入宮の落胤として登場して来て世界が急に拓けているのであるから。）「常陸の前司殿の姫君と言わしめて、井蛙然たる田舎上りの守の従者らしさを巧に表現するわけで、守風情の女を「常陸の前司殿の姫君」などと口はばつたい姫君呼ばわりをした、いわば、姫君本来の使用法ではないところに微妙なニュアンスを漂出しているのである。守が、己が実子を「姫君とつけて」、
「姫君とて守はいとかなしうし給ふ」と言う表現の湛える皮肉、滑稽を讀者は読みとつて、常陸守という人間像を形成しなければならぬのである。ところが、此の守すら実は「守も賤しき人にはあらざり

けり上達部の筋にて中らも物穢き人ならず徳いかめしうなどあれば程々につけては思ひ上りて……」と、本来地下人の子弟の成り上り者ではないとするところを注目し度いのである。即ち、特異例すらも、今は守風情であるが、もとの根ざしは上達部という身分の者の女というわけである。

一類では、姫君と呼称される女性の身分階級を見ると

王族系(出生による。臣籍降下者を含む) (頻度以下同じ抄略)

父系 末摘花。紫上。明石姫。權。秋好。女三宮。兵部卿宮女。八宮女大君。中君。浮舟。女一宮。今上一宮。二宮。(夕霧女)

母系 (葵上)。(真木柱)。(雲井雁)

大臣系

父系 (葵上)。(雲井雁)。玉鬘。(真木柱)。鬚黒女。近江君。

(夕霧女)。

大納言系

按察大納言女大君。妹。紅梅大納言女。紫上母。尼の女。

即ち、王族系が圧倒的で次は大臣系、大納言系は頻度数六例にすぎず、最も少い。

以上要するに、源氏物語では、出来る限り上流の女、公卿中でも大臣の女、※更に王族系の女に対し、姫君乃至姫君と呼称したがる強い傾向が窺えるのである。何よりもそれを証するのは、帚木巻(雨夢の品定め)の同一ヶ所において、「わが妹の姫君はこの定に……」と、左大臣の息たる頭中将に思わせ、藤式部丞には、「わが妹どものよろしき聞えあるを……」と差別しないではおれなかつた事実である。

源氏物語における姫君の身分設定における傾向が、王族を除けば、

紫式部日記の前掲、「姫君」と呼称する女性の身分が大臣の女以外には用いられなかつた傾向と全く一致するのである。紫式部日記における宰相君に対する場合と、源氏物語における頭中将藤式部丞の場合とを併せ考えると、符節を合する程よく似ている事も恰好の証である。関係がない為、紫式部日記には、王族系は出て来なかつたが、源氏物語においては、前述の如く、王族系の女を姫君と呼称した例が圧倒的である。この事は、単に数の優位というのみではなく、「中宮にさしつぎ源氏のみ給ふは……」と反省しながら、さしつぎ王族系を立てて、時めかさせるあたりを見ると、どうも源氏物語では、王族系を、大臣系の上におく、つまり、王族系ならぬ大臣系、例えば、藤原氏の女の上に、王族系の女の存在を故意に設定したものの様である。此の姫君の身分において見うけられる王族系の優位と言う事は、一体、何故であろうか、と言う問題(一)、を提起しておく度い。序に、問題自体を少し吟味しておく事とする。「王族系の優位」という事は、「姫君」に限らず、源氏物語一般に通ずる特性であつて、従つて源氏物語中、重要な役割を果す「姫君」の側にも、その特性が現われていると見るべきであろう。即ち、源氏物語全体、並に前篇の主人公たる光君は桐壺帝第二皇子であり、後篇の主人公薫と匂宮、の匂宮は当帝第三皇子であり、薫は朱雀院女三宮と光君、実は柏木との間の出生である、といった、悉く王族系である。そもそも源氏物語の源氏とは、我国の代表的わかんどおりの一門を意味する姓氏である。源氏物語とは、光君と仇名された、ある王族系の貴公子とその子、孫三代の——しかしながら後篇の薫も匂宮も、源氏の分身発展でしかないという意味では、源氏五十四帖

は、光源氏の物語といえる——恋の物語である。しかも、源氏物語の世界では、当時の日本では、女性最高の位——（それを獲得して外戚の威を張ろうと狙う藤原氏の運動は熾烈であった）——、中宮に「さしつづき源氏のたまふは……」と反省し、ことわり乍らも、藤壺、秋好、明石姫と、王族系の姫を登用して君寵を独占させ、他家出身者をかこたせているのである。さて、しかしこれは、古物語一般の共通性格ではないか、と一応考えられなくはない。超人間的仙女かぐや姫——帝をも拒否した至上存在——を除いては、現存本の伊勢物語、平仲物語、落窪物語、今本住吉物語、宇津保物語、等を見れば、伊勢の昔男を業平と仮定すれば母系の王族系、平仲では、この男を平定文とすれば、（父、宇多帝とイトコ）父系の王族系、（母内親王）落窪では姫君は、母系即ち「わかんどおり腹の君」であり、今本住吉の姫君は、ふるき宮腹の御女系、母系、宇津保では、俊蔭は、「清原の王ありけり御子腹に男子一人……」と父母系、仲忠は母系（俊蔭女）、あて宮は「昔藤原の君ときこゆる二世の源氏おはしましけり……時の帝の御妹女一の御子と聞ゆる后腹におはします……九の君あて宮と聞ゆ……」と父母系である、と言う風に、中心人物が王族系である。しかしこれら古物語に於いては、王族系でも血が薄いのであるが、源氏物語では、一世、二世で王系の血が濃く、又登用の頻度が問題にならぬ程高くなつて来ているのである。此の傾向は単に古物語以来の伝統の踏襲とのみでは片づけられない、何かそこに作者の意識がありそうである。この意識とは何か。何に基づくものか、という事を問題とするわけである。註(1)拙著、日本小説史概論上六八頁參照

Ⅰ 姫君の容姿

姫君の容姿について、どの様な形成がなされているであろうか。古物語の域を出て紫式部が独創を誇るものがあるであろうか。形容の語彙としては、をかし、恥し、美し、らうたし、気高し、けぶり、蕪り、匂やか、匂みちたる、もの漕げ、こまやか、ほそやか、愛敬づく、愛敬こぼれおちたる、澄みたる、見ぬく、おほどか、色白、めでたし、なつかし、由づく、ひららか、あはつけき、眠はほし、直し、心にくし、あて、なまめかし、気はひこと、さかりの花、よし、あかぬ所なし、たらひてかたちよし、様態（あらまほし、そひやか、ほそやか、よき程）額の近やか、髪（こちたし、さはらか）等々といった普通の容姿美にかかわるもの、性格美にかかわるもの、が、古物語に比べると複雑になつて来ている。又人物を花——桜、藤、柳——に譬えて表現する。又平板な形容語でなく、感覺的にもつとつことんだ表現、肌つきのこまやかさ、肌の色あひ、髪の色、量感、かかり、手つき、腕、肘を「まろらかにをかし」、「つぶつとぶと肥え」と描出し、或は「なよなよ」、「たをたを」と容姿美の特殊な形成をし、目鼻の形が尋常であるか否か、病気で身体は弱り損われ、心は我執が消えて「らうたげ」になつた美等になると、古物語の域を遙に出ている。一覧表でみると、そこに自ら、姫君一般に通ずる容姿美の様式が窺われ、作者が構想上力を注いだ人物には、形容語の頻度が高く、どの様式の美人であるか俯瞰出来るが、紙面の都合上これを省き、姫君一般としては、「をかし」「美しげ」「あて」「らうたし」「なまめかし」といった形容語のもつ美感で「匂ひやかな」女性美を形づくろうとする。詳論は他日に譲り、一応、個人について個性美形成の面から、何人をどの様に形成しているか、古物語の域を出るものであるか、否か、最後は、何故にその様

に形成したか、という問題(二)に到ろうと思う。

葵 上

「いとをかしげ」で「美しげなる容貌なり」と断定し、「後目に見おこせ給へるまみいと恥しげ」に「氣高う」という型である。病床についてはじめて「らうたげ」になる。貴族の氣位高い姫君の容姿美を形成しているが、古物語に比し、格段の腕を見せる意気込が感ぜられない。

明石姫

「いと美しげにて明暮見奉る人だに飽かず思ひ聞ゆる御有様」と古物語調の抽象的褒詞にすぎない。「朝朗の藤の花」と言い、「なまめかしく匂ある様」で、代表的美人の一人としているが、「紅梅の御衣に御髪のかかりはららと清らにて火影の御姿世になく美しげなるに」とあるのは、落窪物語の「いとようほほえみたる眉口つき燈のあかきにはえて匂ひたるものから恥しげなり」にまさるものではない。即ち、顔のどこがどの様にいいと言うつつこんだ表現ではなく、べた褒めであつて、古物語調の形成を成るものではない。この人物形成に式部はあまり関心を示さぬのである。

紫 上

「らうたげ」「いみじう美し」「様態あらまほし」「御髪」が「所狭うこちたくをかし」である。「辺匂みちたる心地して花といははさくらに譬へ」ても「醜物より勝れたる氣はひ殊に物し給ふ」と群を絶した代表美人であるが、髪を剃ぎ煩う源氏を描き出して、髪之美の特徵を出し、他には、僅に「眉の辺打けぶり」——北山谿太氏は「はれやかならぬ意悲しげに曇る意ととられる」が、「眉のあたり薫る」という用例が二例あるので、やはり通説通り、眉のあたりがぼうつと匂やかな風情を意味するものであろう——が特徴ある形成

で、藤壺に「いとよう似奉れるがまもらるるなりけり」と言い乍ら、「火影の御傍目頭つきなど」という位でどうした折に顔のどこが似ているのかについては言わない。少女らしい類型美は出ているが、古物語調を出ぬ平凡な形成で、この点、あまり腕を揮う意慾がみうけられない。鬚黒大臣の大君、中君、紅梅大納言の大君、中君、兵部卿宮の君、も同断。(抄略する。)

六の君

「人の御程さやかにあえかになどはあらでよき程になりあひたる人」で「様態清げ」、髪(さがりば、頭つき)もめでたく、肌の色も美しく匂やかか、「何事も足らひて容貌よき人と言はむに飽かぬ所なし」といわれ、十二で「幼稚き程ならねば片生にあかぬ所なく鮮かに」盛りの花と、成熟した美人の美を強調して異色を出している。

雲井雁

十四才の「容貌などいと美しうぞおは」す雲井雁は、「片生に見え給へどいと見めかしうしめやかに美しき様し給へり」と異色を出しかけ、風寝姿をもつて来て特殊な容姿美を形づくる。羅の単衣を著給ひて臥し給へる様暑かはしくは見えずいとらうたげに小やかなり透き給へる肌つきもいと美しをかしげなる手つきして扇をもたまへりけるながら腋を枕にして打やられたる御髪の程いと長くこちたくはあらねどいとをかしき……何心もなく見上げ給へるまみらうたげにて面つきの赤めるも親の御目にはいと美しうのみ見ゆ

風寝姿の羅を透かしてみえる肌つきの美、肉づきのいい「まろ」い腕、肘、「つくりたる物」かとみえる手の美、つまり少女期の肉体美、あらわな女体美、を雲井雁の上に設定した事を注目したい。

玉 鬘

右近をして紫上、明石姫、藤壺の令名高い当代三美人に「何処か劣り給はむ」と言わせる。母夕顔「よりも勝りて清らに父大臣の筋さへ加はればにや品高く美しげ」だと設定する。「あなをかしげとふとみえて山吹にもてはやし給へる御容貌などいと花やかにこそ曇れると見ゆる所なく隈なく匂ひきらきらしき様」であつて、「物思ひに沈み給へる程のしわざ」か髪の裾が少し細つて「さはらかにかかれるしものと物清げ」で、「此処彼処いとけさやかなる様」をしている。引きとられた当座は矢張りいくらか「田舎び」ていたが、「人の有様を見知り給ふままにいと様よなよひかに化粧なども心してもつけ給へればいと飽かぬ所なく花やかに美しげなり」と、我から意識して美しくなろうと努めた結果「飽かぬ所なき」美人となつた、と言う事は、式部の姫君における容姿美形成上一進歩である。しかし、玉鬘や近江君に「化粧」させ、三美人（藤壺紫上明石姫）にはその事がなく只管「佳き人とはこれを言ふにやあらむ」と讃えるのは何故か。肉づきがよく「手づきのつづぶと肥え給へる身なり肌づきの襪かに美しげ」である。源氏は玉鬘の美をよくは見知らぬ求婚者に一層印象づけ忘れぬものとする為、実は源氏が玉鬘の容色にあこがれ憑かれた結果、螢を放つた。「螢を薄き紙にこの夕つかたいと多く包みおきて光を包み隠し給へるをさりげなく引纏ふやうにて俄にかく搗焉に光れるにあさましくて扇をさし隠し給へる傍目いとをかしげ……宮は一問ばかり隔てたる見渡しにかくおぼえなき光の打仄めくををかしと見給ふ程もなく紛らはして隠しつされど仄かなる光艶なる事……仄かなれどそびやかに臥し給へりつる様態のをかしかりつるを……」普通の場合の「あて」、「匂ひ」にとどまらず、肌つき、手づきの「つづぶと肥えてこまやか」な美しさ、更に、螢の光に妖しく艶麗な玉鬘の大柄な艶姿を映し出すのは、源氏における容姿美形成の頂点

であるが、その成熟せる女体美、あらわな（当時としては）肉体美としての形成を、当代三美人の上に設定せず、玉鬘を選んだという事、それは何故かを問題にしてみようと思う。

女三宮

「人よりけに小さく美しげにて唯御衣のみある心地す」「らうたげ」で「あてやかにをかし」とくり返し言う。「二月二十日はかりの青柳の儂かにしだり始めたらむ心地して鶯の羽風にも乱れぬべくあえかに見え給ふ」というが「匂ひやかなる方は後れて」いる。「おほどかに美しく」子供の「心地する」人で、性格と一致する風姿で柏木との過失設定を予想しての形成である事（殊に注意すべきは○印の部分）以外、新しい形成はない。

宇治の大君

後篇で容姿に意を払うのは大君である。姉妹の形成しわけは、紅梅大納言女、玉鬘女の場合で一応試み、やや類型化してくる嫌はあるが、大君の特異性が目立つ。接近して観る姫君の容姿も、大君では、「思ふ様に薫をかしげ」であつて、玉鬘、雲井雁にみうけられる「つづぶと肥え」た肉体美とは凡そ反対の、「なまめかしくやせやせ」の美、「御手の細やかに弱くあはれ」で、「肘などいとお細うなりて影の様に弱げなるものから色合かわらず白う美しげにて……恥しげ」で、「なよなよと撓みたる様いよいよ哀れげにあたらしくをかしき御有様」である。しかも、玉鬘、近江君に設定した、化粧による積極的な美創造の意欲、に対し、反対の立場、衰えゆく我が容色への反省、その否定、女房共の「盛りすぎたる様どもに鮮やかなる花の色々似つかはしからぬをさしぬひきつ有りつかず取り纏ひたる姿」どもを見渡して、「我もやうやう盛りすぎぬる身ぞかし鏡をみれば瘡せ瘡せになりもてゆくを口がじしはこの人ども我悪しとやは

思へる後手は知らず顔に額髪を引かけつづ色どりを顔づくりをよくして打振ふめり我身にてはまだあれが程にはあらず目も鼻も直しと覚ゆるは心のなしにやあらむと後めたく……恥しげならむ人に見えむはいよいよ傍痛く今年二年あらば衰へまさりなむ果敢なげなる身の有様を……」と自己を省み責む、結婚をすら断念する立場を設定しているのである。なぜに、玉鬘、近江君に化粧させ、大君に反省させる設定をしたか。問題を提起しておく。

宇治の中君

浮舟との比較においては「心恥しげにあてなる所はこよなし」であつて、「美しくらうたげなる気色」を強調し、大君に比しては、「いと盛りにて美しげなる匂ひ増り給へり」「らうらうしくかどある方の匂ひはまさり給へる」と設定し、此処でも転寝をさせているが、「いとらうたげにて肘を枕にて寝給へるに御髪の溜りたる程など有難う美しげなる……御顔は殊更に染め匂はしたらむ様にいとをかしう華々として……」と同じく肘を枕にさせ乍ら、雲井雁とは全く違つた形成である。「いと盛り匂ひ多くおはする人の様々の御物思ひに少し打面瘦せ給へるしものと貴に艶かしき」と「あて」に「艶めかし」というのが、宇治の大君、中君、浮舟に共通する容姿美の強い特性である。

浮舟

声や「頭つき様体細やかに貴なる程」は大君に酷似しているが、大君に対し「なまめかしき」は劣り、中君に対し「あてなる所」は劣る。が、「ただらうたげに細かなる所ぞをかしき」人で「主は音もせでひれふしたり腕をさしいでたるが円らかにをかしげなる程も常陸殿などいふべくは見えず誠に貴なり」とみえ、「額つき眉目の薫りたる心地しておほどかなるあてさ」「君は腕を枕にて火を眺めたるまみ髪のかほれかかりたる額つきいとあてやかになまめきて……」と貴を強調する。なぜに宇治三姫に「貴」の美をこの様に強調して

形成しようとしたのであろうか。

近江君 末摘花

容貌は「ひららかに」で、「愛敬づ」いて、髪は美しいが、額が「いと近やか」なのと「声の淡つけさ」で感心しない。「紅といふものいと赤らかに搔いつけて」いる。美人というには否定的人物として形成する。末摘花も、鼻の色、形が「あななたわ」といわれる醜女で、他の姫君の引立て役、緊張の弛緩を狙う端役として形づくられている。

■ 姫君の人間的魅力

姫君という一ジャンルの人間群を、どの様な性格、人柄、心遣をもつた人間存在として形成しているであろうか。どこにその人間的魅力を設定しているのであろうか。その事の調査より、何故にその様な形成がなされたか、という問題、(三)に及び度いと思う。

便宜上、大まかに、その程度は別として、肯定的存在——人間的魅力乃至価値多い存在——と否定的存在——人間的魅力に乏しく、価値ある存在ではなく、不快感、嫌悪感をすら招きがちな存在——に類別し、先ず、否定的存在より見てゆく事とする。

純然たる否定的存在は、姫君には設定されていない。つまり「部分否定」である。しかも、否定の度合が極めて薄い。

葵上

「大方の気色も人の気はひもけさやかに気高く乱れたる所交らず猶これこそはかの人々の棄てがたく取り出でしめ人には頼まれぬべけれ」「余り塵はしき御有様のとけ難く恥かしげに思ひしづまりたまへるをさうさうしくてともかくも違ふべき節あらむを長閑やかに見忍ばむより外に増す事あるまじかりけりと言ひて我が妹の姫君はこのために適ひ給へりと思へば……」と端麗高貴な容姿心情の持主で

は葵上は北方としては一応理想的な頼みになる人と言う事が出来る。殊に肉親の兄の目からみれば。しかしそれは夫源氏からは、反面、うちとけにくいほどの度すぎた端正さであると思われる。

「あたら重りかにおはする人の物に情おくれてすぐすぐしき所つき給へるあまりに自らなきしも思さざりけめども斯かる仲らひは情交すべきものとも思したらぬ御心掟に従ひてよからぬ人のせさせたるならむかし」と、高貴な人の北方らしく「重りか」であるのはいいが、惜しい事に、圭角のある人で物事に情愛の乏しいうらみがあり、我儘育ちで人の思わくなど考えぬ性質だものだから、又、北方と側室との間は表面なだらかに文通位はしなくちやいけないものだとも思つてらつしやらない御心構だものだから、御自身で示唆したわけでもないのに従者共が六条御息所の御車に乱暴を働いたのだと源氏は心中批判し非難するわけである。「ただ絵にかきたる物の姫君のやうにしゑられて打身動き給ふ事もかたく難はしうてものし給へば」と、愛される事のみを知つて愛する事、愛される為に苦勞する事をしらぬ、葵上の態度に接し、「さうさうしくて」、もの足りなく、つまり魅力を感じないで却つて魅力のある中納言の君、中務、と冗談をいふのである。夜の御座に入つても女君はふとも「入り給はず聞え煩ひ給ひて打敷きて臥し給へるもなま心づきなきにやあらむねぶたけにもてしてとかう世を思し乱る事多かり」と、上掲の性格、態度をもつた葵上に年少の源氏は人間的魅力を感じるところか、その態度に「なま心づきなき」思——不快感、嫌悪感——を覚えるに到り、その為に「世を思し乱る」——愛情を他に求めて彷徨をはじめたる事となるという設定である。

近江君

父大臣が「女御の御方などに交らはせてさる痴のものにしないでむ」と蔑視し

ている如く、天下の笑われ者であるが、悪人ではない。無教養、粗野、無遠慮の為に貴族社会で通用しないだけで、人間として否定されるべきものではない。つまり庶民社会ではむしろ肯定されるべき人間で、「よろしき親の思ひ傳かむにぞ尋ねいでられ給はまし」と同情され、「氣近う愛敬づきて打解け戯れたるは然る方にをかしう罪許されたり唯いと鄙ひ怪しき下人の中に生ひ出で給へれば物言ふ様もしらす……いと言ふ甲斐なくはあらず三十字余り本末あはぬ歌口疾く打続けなどし給ふ」で、気軽で愛敬がある。父大臣にも夕霧にも何の気取り遠慮もしらず思う儘に物を言いかけるので嘲笑を買うわけで、父大臣の扱方を非難している口吻がしばしばである。即ち、これは、場違いの為に否定的部類に属したものであるが、庶民階級におけば、才気もあり、派手で邪気がない、人間的魅力にとんでいる存在であつて、その魅力が、貴族社会では逆作用し、「をこなる者」となる、という設定である。

未摘花

「げに品にもよらぬわざなりけり」と歎ずる程、王族の邸にあるまじき、無教養、才気なき、融通きかなさ、古めかしさ、センスのなさ、これも物笑ひの種であるが、決して悪人ではない。むしろ根つからの善人で、おつとりして、節操かたく、誇を持しつづけるが、「人の言ふ事は強うもいなひぬ心」もあつて、我儘さはない。哀をさそうという点でからくも源氏の庇護をうけるので、人間として積極的的魅力はない。

肯定的存在

藤壺

「足らず又差過ぎたる事なく物し給ひけるかなと有り難きにも……唐人の袖ふる事は遠けれど立ち居につけて哀れとはみし……斯様の方さへ迎々しからず他の朝廷ま

で思はしやれる御后言葉のかねてもと……」という風に、教養、学才、人間としての器量、罪の相手を拒み乍らもその真情をなみする事の出来ぬ情愛、気高さ、何一つそなわらぬものなき理想的存在、主人公源氏が生涯最も心惹かれた、最も人間的魅力をもつた存在である。

紫上

「幼き人は見附い給ふ俤にいとよき心様にて……いと聴くて難き調子どもを唯一わたりに習ひとり給ふ大方らうらうじくをかしき御心ばへを思ひし事叶ふと思す……」
「姫君の御文は……物の色し給へる様などいと清らなり何事もらうらうじく物し給ふ……」
「いとおほどかに美しうたをやぎ給へるものから流石に執念き所附きて物怨じし給へるがなか〜愛敬づきて腹立ちなし給ふをかしう見所ありと思す……」
「心ばへのらうらうじく愛敬づき果敢なき戯れ事にも美しき筋をしいて給へば……」
「なつかしうをかしき御有様めやかなる御心ばへも思ひ遣り深う哀れなれば麗でちるもなし……そこらの中にすぐれたる御心さしも理なりけりと見奉る……」
藤壺と重つてというより、藤壺は別格であるから「そこらの中で第一に源氏に人間的魅力を感じさせたという紫上は、素直な心情、教養の高さ、聡明な頭脳、すぐれたセンスと技術——（歌弦より裁縫染色洗濯にいたるまで）——をもち、おつとりして、ものやわらかである。愛敬があり親しみやすい性質で、何人にも思ひ遣りがあり実意真情の持主である。しかも適当な嫉妬をする瑞々しさがある。ことに身をつつしみ、憐むあわれがある。源氏の側近、その子女への思ひやりも深い。理想的人間像——最も常識的理想型の人間的魅力形成——である。

玉鬘

源氏の心をそのふくよかな容姿と相俟つていたくとらえた人間的魅力は奈辺にあるかというのと、「心ばせおほどかにあらまほしう物し給ふ、心

ばへのオ々しく気近くおはする君にて対面し給ふ時にも細やかに隔てたる気色なくもてなし……人さまのわららかに気近く物し給へば猶愛敬づきたる気はひのみ見え給へば……」
「女はわららかに賑ははしくもてなし給ふ本性……まみのあたりわららかなるなんいとしも品高く見え出りける」
「まろらをもらうたく懐しうなむし給ふ明暮をかしき事を好みて物し給ふ」

「心はへ」「心ばせ」「本性」を説明したところは、おつとりしてくせのない理想的性格であり、才気があり、ツンと澄すのでなく、人なつくく親愛をたたえた態度、陽気にふるまい、さばしぱしたタイプ、といった愛嬌のある人物で継子達からまで慕われるというのである。「わららか」という語がしきりに用いられている事、「気近し」、「賑ははし」という形容語が重つて、今迄にないモダンな明朗型のもつ魅力を形成した。源氏のあやしげになつて来る複雑な親切心に対しても「御心ばへのいと有り難きを親と聞ゆとも……え斯うしも細やかならずや……人の有様世の中のある様を見知り給へばいと慎しう心と知られ奉らむ事は難かるべう……」と、迷惑に悩みながらも、真情にしみじみ感謝し源氏の心を慮つて肉親の父との対面の機をせきたてたりはしない、優しい真情と才気と思慮がある。が、教養の点では、螢兵部卿宮が返歌をみて「手を少しゆるぎついたらばと宮は好ましき御心に聊か飽かぬ事と見給」うたし、琴も、年をとつている割に心得が乏しい。この様に、藤壺、紫上、明石姫とは全く異つた型の形成である。その容姿美の特殊性と相俟つて新しく人間的魅力に溢れる形成を狙つた事がわかる。

真木柱

「母君の怪しくなほ僻める人にて……口惜しきものにおぼして継母の御辺をば心つけてゆかしく思ひて今めさたる御心さまにぞ物し給ひける……」と新しい型を

創ろうとし、脇役で力を拵いてはいるが、後年の継子への態度等よりすれば玉鬘型人物である。

雲井雁

夕霧との恋を堰かれるあたり、「まうもさこそはあらめ」と「少し鎖く」様が幼げであるが、結婚後、もの堅かつた夕霧に愛人落葉宮が出来ると、花散里に「三条の姫君のおぼさむ事こそいとほしけれ」と忠告され、「ちうたげにも言はせなす姫君かないと鬼々しう待るさがな者を」と冗談をいう夕霧は、筒井筒の気安だてに「鬼」と名づけている。「何事言ふぞとよおいらかに死に給ひね摩も死なむ見れば憎し聞けば愛敬なし見捨てて死なむは後めたし」と若々しい腹立ちをするが「いとをかしき様のみまさ」る態度であつて、「何くれとこしらへ聞え慰め給へばいと若やかに心美しうらうたき心持におはする人なれば等閑事と見給ひながら自ら和みつつ物し給ふ」という素直さである。若々しく思ひきり嫉妬する姿も可愛らしく、結局巧くあしらわれる少女のままの人柄であるところに新しい魅力を設定しているわけである。

宇治の大君 中君

中君をして「故姫君のいとしどけなく物はかなきまにのみ何事もおぼし宣ひしかど心の底のずしやかなる所はこよなくもおはしけるかな中納言の君の今に忘らるべき世なく歎きわたり給ふめれどもし世におはせましかば又かやうに思ふことばありもやせましそれをいと深ういかでさはあらじと思ひ入り給ひてとさまかうさまにもて離れむことを思ひかたぢをかもかへてむとし給ひしぞかし今思ふにいかにおもりかなる御心おきてならまし亡き御影ども我をばいかにこよなきあはつけざと見給ふらむと恥しう悲しくおぼせど何かはかひなきものから斯かる気色をも見え奉らむと恐び返しつづ聞きも入れぬまにて過ぐし給ふ」と故姉姫を回想させているところは、大君の性格、人物を決定的に形づくと共に、巧に

中君の性格、人柄を対照的に形成しているのである。大君は、「静かによしあるかた」「け高く心にきさま」「ちうらういくおもりか」と強調されている通り、行住坐臥日常生活においては気品ある物静かな由ある方で身の処し方は、「いとしどけなく物はかなき」様であつたが、「我は如何に生くべきか」の問題については、才気あり惻愍な中君「らうらうじきかどある」が、姉君まかせで我から深く悩む事が乏しかつたのに比し、著しく深刻に考えぬき、遂に自己に最適の道、独身、父の如く仏に仕える道を見出していたのである。しかし妹中君の将来については、薫との人並みの道を予想していた。父宮なき後の来客との応待も無難に出来る腕があるが、中君の匂宮との不意の結婚、その後の夜離れについてあまりにも責任を感じ懊悩し世をちぢめてしまつた。薫の慕情に対し感謝と拒絶をなまぜにして適宜な表現を自らとる事が出来る。思い余つて部屋ににじり入つた薫をたしなめて嘆きつつ事なく夜をあかさせるらうらうじさ。ありがたき薫の真情への感謝が軽忽に慕情乃至求婚の応諾とならない思慮深さ、重りかなのである。薫の真情に打れて看病をうける臨終では「空しくなりなむ後の思ひ出にも心強く思ひ限なからじと憤み給ひてはしたなくもえ押放ち給はぬ」心配りが残つていた。事とある折はただたどしげながらあやまりなくやりとげる人なのである。この様な姫君形成は夕顔巻で光君をして「果敢なびたるこそ女はらうたけれ……自ら捲々しくすくよかならぬ心習ひに女はただ柔和にしてとり外しては人に歎かれぬべきが流石に物憤みし見む人の心に従はむなむ哀にて……」と語らしめた、当時の理想的・式部にあつては、一面の（とは、式部はかかる古い理想型の外に新しい型を他面に形成していた）人間の魅力に溢れる女性の間像を此処で思いきり形成したものの如くである。中君

は、前掲「何かはかひなきものから斯かる気色をも見え奉らむと忍び返じつゝ聞きも入れぬさまにて過ごし給ふ」と言うごとく大君に比べると著しく「かどある」賢く素直な紫上系の「らうたげなる」姫君にすぎない。

浮舟

「おいらかにあまりおほどきすぎたるぞ心許なかめる……らうたげにおほどかなりとはみえながら色めきたる方は添ひたる人ぞかし見めきおほどかにたをたと見ゆれど気高う世の有様をしる方少くて生ふしたてたる人にしあれば少しおぼずかるべき事を思ひよるなるべし」心深かつた大君の人形であるが「たをたと」と「らうたげにおほどかな」様態は似ているが、おつとりしすぎ、色めいたところがあり、「ただらうたげに細かなる所」が、匂宮にはこよなき魅力であつたと共に、姫君中唯一の特色ある形成である。殊に、「おぼずかるべき」事——自殺——まで思いつめると言う、新しい型の創造である。權、大君は最後まで許さなかつた。女三宮、藤壺は戦き恐れた。浮舟は匂宮の情熱にほだされる色めきたる方をもつた人間であつて、それぞれに、それぞれ故の魅力をもつ事上述の通りであるが、何故にその様なそれぞれの魅力を形成したが、という問題を提起しておく事とする。

三

紫式部の憂愁

「秋のけはひの立つまに」始まる現存本紫式部日記一卷は、御産の中宮彰子に随伴して、土御門殿に退つた紫式部が、幸運の期待に湧く邸内の一員として生活した寛弘五年七月より十一月初旬迄、並びに、その後、同七年正月頃迄の宮中生活の期間に、折にふれ、

事に際して胸奥に去来した感懐の記録であるが、「いはむかたなくをかしき」土御門殿で、いつきかかずかれ給う彰子の様子をみて、そのめでたさを讃える自己は「うき世のなぐさめにはかかる御前をこそ尋ね参るべかりけれと現し心をばひきたがへたとしへなくよろづ忘るるにもかつは怪しき」と「ひきたがへ」「忘れ」なければ、わが人生を「憂き世」に住する身と

観じている心——「現し心」——であつて、御産の悦びにごつたがえす土御門殿の産養をはじめ諸行事のめでたさを叙し続け乍ら、それになじまぬ異質の自我、要するに別世界の慶事にすぎぬと知る身の寂寥感が底流にあつて、恰も、深みゆく秋の気配の如く、いかにもしめやかに流んだ鬱困気が全篇を蔽うている。自宅に里帰りして、宮仕前の我が身を振り返り、現在の我が身に及びつつ「さも残せる事なく思ひし身のうさかな」という心、自負するところのあつた自作の物語をすら、「試に物語をとりてみれども見し様にも覺えずあさましくあはれなりし人の語らひしあたりも我を如何におもなく心浅きものと思ひ毀すらむと推し測るにそれさへいと恥しくて音づれやらす……音なひくる人もかたうなとしつゝ縊べてはかなき事に触れてもあらぬよに來たる心地ぞ此処にてしもうちまさり物あはれなりける」と、氣負うていた当初思つた程、今ではいい出来とも思えなくなつて來た。人の噂も氣になり、親しかつた友との交際も、何時の間にか、我から断つ結果となり、自分の家に歸つてすら、異つた世界に來た様な「あはれ」を感じる。此の、どうにもならぬ式部の「憂愁」は、一体何に根ざすものであろうか。

ただ過ぎ、才学朋輩に秀れて、上臈ならぬ宮仕をする才媛は、當時、何も式部に限つた事ではない。皇后、中宮、齋院、その他、のサロンには、その例が少くなかつた筈である。

後輩の孝標女は、実に素直、素朴に自己の「憂愁」の原拠について

て語つた。

「こだいの親」は、「宮仕人はいと憂きことなり」と思つて躊躇して
いたが「今の世の人はきのみこそは出でたてさておのづからよきためしもあり
ても試みよ」とすすめる人の言について出仕したが、古風な親が間も
なく宮仕をやめさせた事について、「かう立ち出でぬとならば……おのづ
から人のやうにもおぼしめてなきせ給ふやうもあらし」と思うし、又「さり
とてその有様のたちまちにきらきらしき勢などあんべいやうもなくいとよしなかり
けるすずろ心にててもことの外にたがひぬる有様なりかし」と反省し、「いくちた
び水の田芹をつみしかば思ひし事つゆもかなはぬ」と嘆いてゐる所は、宮
仕所で信任を得て、出世する、いい羽ぶりになる、という事が出
来なかつた事、——世話する人の腹の中には、良縁を捉むチャン
スがある事をも仄めかしているが——に基づく迷懷、なげき、と
思われる。しかし、結婚し、姪にひかれて再び宮仕にも顔を出す
が、子供が生れると、「今はひとへに豊かなるいきほひになりてふたばの人を
も思ふさまにかしづきおほしたて我身もみ倉の山につみ余るばかりにて後の世まで
の事をも思はむ」と、経済生活の豊かさを願つて物詣に熱中する。果
ては「何事も心になはぬ事もなきままに……」と言ひ出し、宮仕で出世出
来なかつた事など忘れてしまつて、「かやうに絶ち離れたる物詣をしても
道のほどををかしとも苦しとも見るにおのづから心も慰めきりとも頼もしうさしあ
たりて嘆かしなどおぼゆる事どもないままにただ幼き人々をいつしか思ふさまにし
たてて見むと思ふに……頼む人だに人のやうなるよこびしてはとのみ思ひわたる
こち頼もしかし」と、すつかり幸福感に浸つてゐる——憂愁の解消
である。ところが、夫橋俊通の死去に遭うと一時に憂愁の境におち
てしまひ、「年ころ天照大神を……と見ゆる夢は人の御乳母して内わたりにあり
帝后の御蔭に隠るべきさまをのみ夢ときも合せしかどもその事は一つかなはでやみ
ぬ」と、宮仕所で出世出来なかつた不満が又急に頭をもたげて来て

「かうのみ心に物のかなふ方なうて止みぬる人なれば」などと、我が身を嘆く
事になるのである。即ち、宮仕所で出世する事、良縁を得る事、夫
妻子供が善なく夫が分相応——彼女は大臣になつてほしいとは言わ
ぬ、世間普通の中流生活者、その家系の人としてありふれた出世は
守どまり——の任官をし、金持になりたい、という位の欲求をもつ
ていた。浮舟の様に空想したのは「昔のよしなし心とのみ思ひしりは
て」いるのである。家庭の愛情に浸つて、「何事も心にはぬ事もなきま
まに」と思つた孝標女が、老来、夫に死別して孤独になつた時、起
つて来た不満は、幸福な時代彼女の潜在意識下に眠つていたもので
ある。その尤なる者が、「高貴な方の御乳母になり帝后の庇護をう
ける」筈の予想が外れた事である。

さて、紫式部に戻つて来ると、そこに同じ様な「思ふ事の少しもな
のめなる身ならましかばすきすきしくもてなし若やきて常なき世をもすぐしてま
し」と言ひ表現をみるのであるが此の「思ふ事」とは何か。

I 宮仕所

宮仕所において、清少納言は感じなかつた欲求不満を、紫式部は
感じていたらしい。(註) 平安文字研究第十九輯所収拙稿、自我に
反撥するもの——清女の場合と紫女の場合——参照 前述、孝
標女は、宮仕所においては、あまりにも早くやめたために信任もえ
られなかつたのであつたと嘆いたが、再度の出仕でも時折りまいる
まらうどにさしはなたれていた、おとなとして遇される信任はもと
よりないが、もの馴れ顔の信任をうけている女房達をみても、さして
羨しくも感じなかつたが——結婚生活の幸に浸つていた間は——、
晩年やはりわが生涯をふりかえつてみて、折角のいい夢——高貴の
御乳母となり帝后の御蔭にかくれる——は実現しなかつた、と嘆く

ところをみると、心の奥底に、宮仕所において主人の特別の信頼、愛護を蒙らなかつた事が、かなり根深い不満であつたらしい。朋輩の嫉視、反感に悩み、誤解や無理解に到頭自宅に引き籠つた清少納言は「殿などのおはしまさでのち……何とも無くうたてありしかば久しう里にいたり御前わたりの覚束なきにこそ猶え絶えてあるまじかりけれ……」の項下において、中宮をお慕い申す心情を「例ならず仰言などもなくて日頃になれば心細くて打ち眺むる程に長女文をもて来たり御前より……ここにてさへ引き忍ぶるも余りなり人伝の仰せ書きにはあらぬなめりと胸つぶれて疾くあけたれば……それに言はで思ふぞと書かせ給へるもいみじう日頃の納言歎かれつる皆慰めて嬉しきに」と記して面目躍如たるものがある。あまりの嬉しさに気もあがつて天下の才媛が、この古歌の上の句を忘れたのであつた。その後、出仕して「いかがと例よりは積ましくて御几帳には隠れて待ふをあれは今まありかなど笑はせ給ひて……大方見つけでは暫しもえこそ慰まじけれ……変りたる御気色もなし」と言つた、世界中第一の知己、その才能を賞讃し、引き伸してくれる人が我が主人であり、それに感激し、年下の同性である中宮に崇拜と信頼とを捧げているのが清少納言で、枕草子随処に、中宮と清少納言との間に、魂のふれあいと言うか、外目にも羨しい親愛の情の交流が窺われる。これに比し、紫式部は、中宮、その父母からも相当の信任をえていたらしいが、清少納言ほどの感激は生じなかつたらしい。次に、清少納言は定子中宮のサロンにおいて、才能表現の機会をえ、讚歎と名声とかちをえた。頭弁、頭中将をはじめ、上達部、殿上人といった宮中きつての文化人を相手に大いに才学の程を現わし、溜飲を下げ、思う存分万人に讚歎される機会があつた。

これに比し、彰子中宮の宮殿に仕えた紫式部の場合、後輩の孝標女とも、先輩の清少納言のそれとも態度が全く異つて来る。中宮彰子を「飽かぬ所なくらうらうしく心にくくおはします云々」と、一応、讚えはするものの、紫式部が中宮に対する本心をさらけ出すのは、彼女が彰子の弁護をする中、語るにおちているところである。その讚え詞も、「宮の御心飽かぬ所なくらうらうしく心にくくおはします」と積極的に肯定の断定はして、いず、「……心にくくおはしますものを」と逆接で続け、否定の、「あまり物づつみさせ給へる御心に……とおほしならひたり。」で断定するのである。「あまり」とは「あまり」の下にくる態度、動作が適度を過ぎている場合、つまり価値消失の、否定さるべき態度、行動である場合を意味する語である。中宮の度すぎた物づつみ」を弁護しようとして、「まだいと幼き程におはしまして世になうかたはなりと聞し召しおぼししみにければただ殊なる答なくて過ぐすをただ目やすき事におぼしたる御けしきにうち見ぬいたる人の女どもは皆いとようかなひ聞えさせたる程にかくならひにけるとぞ心得て待る今はやうやうおとまひ給ふままに世のあべき様人の心のよきもあしきも……皆御覽じしりて……」と、中宮を眼下に子供扱いにし、例えば中宮に樂府を教えている、という口吻が絶えない。従つて、紫式部は、清少納言の様に、大きく包まれる主人の愛を感じなかつた。むしろ幼稚な姫君、この頃は大大思慮分別をわきまえて来られた云々といった批判的立場、上掲文をみれば主人の態度をもどかしいとも思う感じをもつていた。次に、清少納言の名声が流布した後、彰子のサロンが「うもれたり」という世上の評価に対して、弁解これつとめ乍ら、「下臈の出で合ふを大納言心よからず思ひ給ふなればさるべき人々里にまで局なるもわりなき暇に障る折々は対面する人なくてま

かて給ふ時もあり……」之は、苦しい弁解、言いのがれに過ぎない。此の場合、清少納言ならば、大納言の満足する応待が出来たのであるが、清少納言の様に、明朗洗練された社交性、敏捷な才智に恵まれていなかつたために、機を逸したのは、何も紫式部以外の女房のみの責任ではない筈で、紫式部自身も「対面する人なくてまかで」させた責任は負うべきものであろうのに、それを我が身に反省する事は彼女の自負が許さなかつた。式部の才能はサロン向きではなく、独居的思索的性格をおびる観照の世界のものであるが、己が才学を宮仕所において十二分に發揮出来ぬ不満が、先輩清少納言の声望の後だけに、「うもれたり」の批判に一層煽り立てられて式部の心にひろがつた為と思われる上掲引用文其他にみうけられる彼女の苦しい弁明である。

Ⅰ 家系

次に女性最高の地位、后、女御、更衣、尙侍を含む後宮の貴婦人になれぬ不満をあげよう。更級日記の著者は、好きな物語を入手して、「後の位も何にかはせむ」と放言した。平安朝の女性は、その程度の差は無限であろうが、一応は、意識的にか或は無意識的に、女性と生れた以上我身の最高の理想を後宮の貴婦人においていたからこそ、「後の位も」と口が滑つたわけである。清少納言は地方官任官にすら苦杯を嘗め続けた清原元輔の子であるから、「主殿司こそ頼まかしき物はあれ下女のきははさばかり羨しきものはなし……主殿司の顔愛敬つきたらむ一人もたりて装束時に随ひ装束衣など今めかしくて歩かせばやとこそ覺ゆれ」と、現実問題としては後宮の主殿司をあげた。清原家、菅原家、共に早く政権の坐を逐われた家系である。故に孝標女の少女期の空

想も、表現されたところでは——意識下に後の位があつても——「浮舟の女君」なのである。「後の位」を「浮舟の女君」と変更を余儀なくさせたものは、菅原という家系に外ならないのである。さて、紫式部の場合、どうであつたか。家系は、閑院左大臣贈太政大臣藤冬嗣五世の越前守為時の女である。曾祖父兼輔は中納言であつた。同じ冬嗣五世の権中納言為輔の男宣孝の側室となつたが、宣孝の曾祖父は三条右大臣定方である。式部が結婚した時に宣孝は既に相当の年配であり、しかも、数人の北方側室との間に子女も多かつたが、家系が式部の家より良かつたために婚姻が成立したものと思われる。当時の一人の人は、式部や夫宣孝等の家系と同じく藤冬嗣の後裔であり、その五世。摂政関白太政大臣兼家の男、道長である。この事を「もとの根ざし」を強調する犀利な頭脳の紫式部がなおざりに思う筈はないのである。

此処に、問題(一)、王族系の優位は何故か、をもつて来て考えてみよう。前述の様に、紫式部は、日記の時期に到る迄、中宮及び上臈女房(大臣の女、孫女出身)に対し「何事をかはかしくのたまふべくもみえず」と、才学の点では相当低く評価していた。又容姿の点でも(平安研究十九輯参照)式部が絶対的に讚美する人はなく、部分的に美を認めるだけであつた。門地、もとの根ざし、を言えば、名門冬嗣の出であるから、『式部らも侍るは』、と言う気持はなしとしないであろう。もとの根ざし、才学、容姿人柄、三者揃つている人は式部の眼中にはない様であつた——日記の時期迄には——。僅に、同じ藤冬嗣の門地の中でも、忠平系、で今現に父が摂関、大臣であるものの女が、後宮の貴婦人となつている現実の社会への不満が、素姓として、式部

にとつても、又、何人にとつても、手の届かぬ王族系を、自作の物語の世界では、圧倒的人気ある皇后、中宮、女御、北方にし、女主人公を形成せしめたのではあるまいか。しかし、この事は、王族系を尊敬しての形成と簡単に考えてはならない。玉鬘の物の師の零落したわかんどおりの女、末摘花の貧窮と無教養は現実の王族系への輕蔑をすら形成しており、藤壺、女三宮の過失は、輕忽に見逃せないのである。

又、問題(一)、容姿美における諸問題について言えば、源氏物語の世界における当代の理想的三美人とは、藤壺(先帝皇女)紫上(式部卿宮女)明石姫(桐壺帝孫女)である。それは前述の如く、高貴にして完全なる美人と、やたら褒める丈である。肉体の美しさ、風寝姿のあらわな魅力などは、同じく風寐姿を描いても、王族系美人には設定しなかつた。平凡な一地方官であるが愛情深い夫との結婚生活に満足しきつて社会への不満を忘れ果てた孝標女と異り、同じ藤原でも自家よりいささか格が上るといふ、相当の年配で、おまけに妻室が多く、大きな子供もある宣孝の側室にすぎなかつた式部の結婚生活、それも両参年という短さは、現実社会に対する如上の欲求不満を煽り立てこそすれ、憶い出が不平を癒すていのものではなかつたと思われる。単なる古物語的王族系への尊敬信頼で、この老大な長篇における人的構成における圧倒的の優勢が將來されるわけではない。前述「中宮にひきつづき源氏の給ふは……」という反省は、何よりも意識的に人間構成をしている事を物語っている。何を、意識的人間構成かと言えば、眼前の社会における藤原氏の権力は、すべて中宮女御等の後宮政策成功の結果であつて、衆愚

の目には「めでたさの極み」とみえるものである。これに、何等かの反抗、抵抗なくしては、社会の現実と全く異つた王族系支配の社会を形成出来るものではない。後の位を夢見る事は断念せねばならぬと自覚する藤原末流の、世界的大ロマンを創り出せる能力ある才女は、その現実の結婚生活があまりにも夢とかけ離れていたが為に、一方宮仕においては、中宮、上臈女房に対し実に冷静に批判的であり、その自作の大ロマンにおいては、自分達藤原——(中宮定子影子以下貴婦人を含む)——より一段格が高い王族系をその一流の女性達に配し、彼女達は、容姿において、所謂完全な理想型美人——旧来の審美評価による——であり、人間の魅力においても、宇治の大君の如く、藤壺、紫上の如く、所謂「あらまほしき」理想の人間のもつ魅力——旧来の常識的通俗による女性評価による——を一応備えるものとして形成したものはあるまいか。

次に、式部が、容姿の美、人間の魅力の問題(三)において新しく独自の形成を誇る他の一面を考へる際念頭に浮ぶのは、帚木巻の「もとの品時世のおぼえ打合ひやんごとなき辺の内々のもてなし気はひ後れたらむは更にも言はず何として斯く生い出でけむと言ふ甲斐なく覚ゆべし打合ひて勝れたらむもことわりこれこそは然るべき程と覚えて明らかなる事と心も驚くまじ」と言う馬頭の発言である。氏素姓と言ひ現在天下の権勢家、上流の姫君について先ず、「人にもてかしづかれて隠る事多く」とは、かくるる事、つまり欠点がある事を予想した言い方で、その欠点がかくせるから、「自然にそのけはひこよなるべし」というので、上流の姫は名門が自然にけはひがこよなし、とは言わないのである。「内々のもてなし気はひ後れたらむ」と、否定的立場から物を言う事は、始めから、上流階

級の女に価値乃至魅力をあまり認めぬかの如き印象を与える。肯定の場合ですら「これこそはさるべき程」、当り前と感じ、さして魅力も興味も湧かぬとは、頗る苛酷冷やかな上流の姫君評価である。式部は、上流の姫の良さは中流下流の女の良さとはかけ離れあてになまめかしいとは決して言わないのである。即ち上流の姫は良きにつけ、悪しきにつけ、興味をひかぬ、つまらぬとは、つまり、上流の姫の全否定ではないか。此の馬頭の発言を一馬頭の偏見として否定するどころか、聴き手の光君をして「いでや上の品と思ふにだに難げなる世を」と思わせているのである。即ち、王族系を優位にはしても、藤壺、女三宮、紫上、明石姫、中君、又大臣系の葵上には、それぞれ気品高くらうたげ云々と一通りの讃辞は呈しても、個性美の形成、人間的魅力が乏しい——(葵上は前掲、否定的部類に属する性格)——のは、式部の対上流意識——上流の姫君など「何事をかはかしくのたまひなすべき」という、上流に反撥し——「見めいたまふ、いとようか
ない……」と、蔑視すらもしている気持、同じ名門の我に、個人としては何等勝るべき覚えのない者が、その父祖の高官故に後宮の貴婦人となつているといふ口惜しさ、不満に基づくものであり、又、上の上たる王族への不満は式部をして容姿、人間的魅力、何一つとして不足のない藤壺に、又らうたけた女三宮にゆゆしい過失を設定したのは、最高級の姫君すら、「頼もしげなき疑ひあらむこそ大事なるべけれ」の対象となり、二人に比し、再度の誤を犯さなかつた故衛門督女空蟬の設定と対照させているのである。これに対し、「さて世にありと人に知られず……らうたげならむ人の閉ぢられたらむこそ限りなく珍らしくは覚えぬ如何ではたかかりけむと思ふより違へる事なむあやしく心留まるわ

さ」と中流にはあやしく心留まる人がいる事、「中の品になむ人の心ぞおのがじし立てたる趣もみえて……」と特色ある生き方、个性的魅力の存在を力説するのである。即ち、例えば、玉鬘の「わららかさ」、
「らうらうじさ」、才智、浮舟の「色めきたる方」、近江君の憎めない愛敬、が、上流に設定されずに、もとの根ざしは貴いが、中流の生活に堕ちて苦勞をして来た姫君に、新しい型の人間的魅力を形づくり、葵上には否定的面を与えたのは、式部の心底にある、対上流意識——上流の姫何するものぞ——、もとの根ざしは高く、中頃沈んだ我が身の如き身でなければ人間としての味は出て来ないという自負に基づくのである。玉鬘、雲井雁、近江君の上にもみる肉体美、あらわな女体の美は、同じ父大臣の娘、つまり、遺伝的體質、性格という事も十分に考慮に入れて式部は設定しているのであるが、それと同時に、大臣系の、しかも劣り腹の姫の上に、式部としては大胆に新しく形成する容姿美、性格美——(旧来、古物語をはじめ通念ではない美)——を試みたわけで、或は生ずるかもしれぬ「あらわ」、「心見えなり」という世上の評価を十分考慮に入れての上であると思うのである。

——(昭和三十一年十二月稿)——